

For citation:

仲 公一 (2011) 豊かなかかわりを通して生きる力をはぐくむ学習の創造—ひと・もの・こととよりよくかかわり合う力の育成—. In: Reinelt, R. (ed.) (2011) *Foreign Language Learning and Teaching Places: Schools, Universities and Others* Rudolf Reinelt Research Laboratory EU Matsuyama, Japan, p. 11 – 23.

《H22・外国語活動研究発表会本校の取組》

(プロット)

ただ今から、本校の研究の取組について説明させていただきます。

始めの言葉

本校では、「心豊かにたくましく生きる清水っ子の育成」を教育目標とし、「徳・知・体」の調和のとれた児童を育成する教育活動を目指しています。

本校の教育目標

そして、「豊かなかかわりを通して生きる力をはぐくむ学習の創造ーひと・もの・こととよりよくかかわり合う力の育成ー」を研究主題とし、外国語活動と国語科を中心として「よりよいかかわり合いの場」としての授業の創造を目指し、本校教育目標の具現化を図っています。

本校の研究主題

研究の目標として次の二つを設定しました。

研究目標

一つ目は、「国語科や外国語活動において、『話す・聞く』活動を中心として、授業における三つのかかわり合いに着目した教師の有効なはたらきかけの在り方や、日常的な音声言語活動を工夫することにより、相手と自信をもってよりよくかかわろうとする子どもを育てる。」

二つ目は、「言語活動の充実を図ることで、子どもに課題解決に必要な思考力・判断力・表現力を育てる。」です。

研究の仮説は、次の三つです。詳しくはお手元の資料でご確認ください。

研究の仮説

本校では、「よりよいかかわり合いの場」としての授業は、ここに示す三つのかかわり合いから成り立つと考えています。まず、自分と教材とのかかわり、次に自分と友達とのかかわり、そして自分と自分自身とのかかわりです。例えば、外国語活動では、教材を工夫することで外国の言語や文化などへの関心を高め、友達とのかかわりを必然性を伴う楽しいコミュニケーションの場として機能させることで、相手とよりよくかかわり、共に生きようとする態度をはぐくむことができると考えています。

授業における三つのかかわり合い

次に研究の内容ですが、国語科・外国語活動それぞれの教科等の特性を生かし、コミュニケーション

研究の内容

ョン活動の基礎である「話すこと・聞くこと」を研究の中核に据えています。外国語活動、国語科とともに、主にここに示した三つのことを、研究内容としています。また、コミュニケーション活動を支える日常活動の充実を図りながらよりよいかわり合いの場としての授業を目指して、日々研究実践を重ねています。

そして、この構想図に示すように、国語科や外国語活動等で身に付けた様々な力を基盤とし、各教科等においても、その特性に応じた言語活動の充実を図るととともに、授業における三つのかかわりに留意しながら授業実践を重ねることで、思考力・判断力・表現力、さらにはひと・もの・こととよりよくかかわり合う力を育てようと考えています。

さて本校は、平成20年度に、文科省より「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」の拠点校に指定されました。拠点校は、「英語ノートの使用」を原則として、第5・6学年において週1時間程度、英語活動の授業を行い、英語活動等国際理解活動の質の向上を図るための実践的な調査研究に取り組むことがその大きな役割でした。特に、「英語ノート」の内容の有効性を探ることを中心として、ここに示した項目について少しずつ実践を重ねて参りました。

平成21年度には、市の外国語活動支援事業のモデル校に指定され、「外国語活動の指導における、教材・教具の開発」や「人材活用を含めた効果的な指導方法の実践研究」に取り組んできました。その中でも、特にコミュニケーションの必然性を高める教材の開発やその指導方法の工夫の研究に重点的に取り組んできました。

今年度は、モデル校二年目として、過年度の課題であった、ここに示した二つのことを踏まえ、次の二つのことに重点的に取り組むことにしました。一つ目は、「コミュニケーションの質を高めるための教材開発とその指導方法の工夫」二つ目は、「『繰り返し』をうまく取り入れながら、英語の音声やリズム、基本的な表現に親しませる教材開発とその指導方法の工夫」です。

研究の構想

これまでの取組（H
20年度）

これまでの取組（H
21年度）

今年度の取組

では、ここで今年度の具体的な取組についてご紹介いたします。まず、本校では、5・6年生ともに、すでに35時間分の指導案を作成してはいますが、よりよい授業を目指して、毎時間の指導について、学年部が中心となつて、ここに示した視点で少しずつ工夫・改善を加えて授業に臨んでいます。今年度は、特に「よりよいコミュニケーション」や「繰り返しの取り入れ方」などを重視してきました。

具体的な取組
《指導案の検討》

次に各学年の取組についてご紹介いたします。まず、5年生では、Lesson 5「いろいろな国の衣装を知ろう」の単元において、コミュニケーションの必然性を高めるとともに、繰り返し発話させ、色や衣装を表す英語に慣れ親しませるために、「一本橋ゲーム」を取り入れました。このゲームは、いろいろな色と種類の衣装を10個程度床に並べ、衣装の種類と色を英語で発話しながら進みます。途中で相手と出会うと英語じゃんけんをして、負けたらチームの最後列まで戻り、次の相手とバトンパスをします。相手の陣まで早くたどり着いた方が勝ちというゲームです。この活動により、衣装の種類や色の英語を繰り返し楽しみながら発話することができるのと同時に、発話が苦手な児童も同じグループの仲間から助けをもらえることで、意欲的に取り組みました。

具体的な取組
《5年生の取組1》

また、同じ単元において、繰り返し発話させ、自信をもって分かりやすく相手に伝えさせるとともに、コミュニケーションの質を高めようと、ショー&テルの活動を工夫しました。ここでは、買い物を通して買った自分の衣装を「ペア」→「グループ」→「別のグループ」と段階を踏みながら何度も紹介させました。聞き手は、ALTから学んだ「Cool!」「Cute!」などの言葉掛けをしました。また、日本語による褒め言葉もOKとしました。この活動により、回数を重ねるごとに、自信をもって表現できる児童が増えるとともに、聞き手から褒め言葉をもらうことが、活動への意欲化につながりました。

具体的な取組
《5年生の取組2》

次に、6年生では、Lesson 4「できることを紹介しよう」の単元において、英語の表現に慣れ親しませ、より実感のこもったコミュニケーションさせるために、次のような活動を取り入れ

具体的な取組
《6年生の取組1》

ました。まず、けん玉・フラフープ・なわとび等の用具を用意し、グループの友達から「Can you～?」と問いかけさせました。挑戦者は、まず、予想で「Yes」か「No」を答えた後、実際にそれらの種目に挑戦してみて、本当にできるかどうかを確かめた上で、「Yes」か「No」を答えるようにさせました。この活動で、より自分の実感のこもった表現ができるとともに、見聞きしている側にも興味深い活動となりました。

また、同じ単元の、「自己紹介カードづくり」の場面では、次のような工夫をしました。本単元で使用する「I can～」に加え、5年生で学んだ「I like～」を使うことで、紹介する内容の幅を広げました。まず、自分の自己紹介に必要なカードを選び、そのカードを担当している指導者のもとへ行って、「What do you like?」「What can you do?」などの問いかけを受け、それに答えたら、好きなもの・きらいなもの、できること・できないことのカードを受け取り、それを自己紹介カードに貼り付けるようにしました。この活動を通して、ショー&テルの場面で相手とのコミュニケーションの幅が広がるとともに、指導者とのコミュニケーションを図りながら紹介カードを仕上げることもできました。

そして、その「好きなもの・嫌いなものカード」の中には、外来語として取り上げられているものだけではなく、たこ焼きやうどんなど、自国も含めたさまざまな地域の言葉や文化に触れられるようにしました。一方、「できる・できないカード」については、初めて取り上げる表現なので、英語ノートに示されている内容に限定して示しました。このように、児童の経験や実態に応じて扱う言葉を吟味しながら示すようにしています。

次に評価について説明します。今年度より評価カードは、一単元分の評価を一枚のカードにまとめ、記述欄には、本時や単元の目標に照らして自分や友達の取組の状況を記入させるようにしました。また、本評価カードをもとに、さらなる改善策を検討しています。

また、外国語活動のコミュニケーション活動を

具体的な取組

《6年生の取組2-1》

具体的な取組

《6年生の取組2-2》

具体的な取組

《指導改善につながる評価》

具体的な取組

支えるものとして、よりよいかかわりを目指し、全学年において、国語科を中心としたさまざまな授業において、「こだまタイム」（ペア・グループ・全体による話し合い）を授業における三つのかかわり合いに照らして、適切な場面で設定し、伝え合い・学び合う場として十分機能するよう指導を重ねています。

さらに、全校集会や学校行事等を活用して、外国の言葉や文化に触れる機会を設け、それらに対する関心を高めています。このうち、各学期1回開催している「すてきなことば集会」は、日常の音声表現活動の成果を低・中・高の学団別に出し合っ、言葉のもつよさやおもしろさ、響きなどを感じ合う場として位置づけています。高学年は、1学期には、「世界のあいさつ」を、2学期は、「世界のじゃんけん」を全校児童を巻き込みながら発表しました。

また、校内音楽会でも、6年生が英語版の「翼をください」を合唱するなど、複数の学年が、さまざまな世界の言葉や音楽を取り入れながら工夫した発表を行いました。

本校には、週に2回ALTが来校してくれます。その2日間を外国の方と直に触れ合える貴重な機会ととらえ、交流を深めたり、英語への関心を高めたりするため、「ALTとの朝のあいさつ」「交流給食」「校内放送でのイングリッシュコーナー」などを行っています。これにより、ALTが児童により近い存在となっています。

ここで、今年度6月と11月に実施した意識調査の結果についてご説明します。このグラフは、「外国語活動の時間が楽しみか」という問いに対する児童の意識です。5・6年生ともに、6月に比べて、「より楽しみ」だと感じるようになった児童が増えてきています。これ以外の調査項目についても、これと同じように11月の方が望ましい結果が出ています。

ここでは、今年度重点的に取り組んできた内容にかかわる調査項目についてのみ、その結果を示します。「外国語を聞くことや話すことが楽しい」と感じる児童は、11月には、90パーセントをこえており、そのうち40～50%の児童が、「と

《全学年・「こだまタイム」の実施》

具体的な取組
《全校表現集会・校内音楽会において》

具体的な取組
《ALTとの全校的なかかわり》

外国語活動に関する意識調査から1

外国語活動に関する意識調査から2

でも楽しい」と感じています。また、「絵や実物で紹介し合う活動」を「楽しい」と感じる子どもも増えていきます。これらは、ショー&テルの活動を工夫してきたことがその一因ではないかと考えます。

また、「聞く態度や話す態度」についても、話す側、聞く側双方が、関心や意欲をもって取り組める活動を工夫してきた結果、「相手の言うことを聞きたい、分かってほしい」、また「自分の言いたいことを分かりやすく伝え、分かってもらいたい」という思いが高まっています。つまり、双方向のコミュニケーションがうまく成立してきているということが言えそうです。

過去3年間にわたり、文科省の拠点校として、また市のモデル校として、さまざまなご支援やご指導をいただいたことで、これまでに次のような成果を得ています。

一つ目は、本校なりのカリキュラムや指導体制、環境等が確立してきたこと。二つ目は、子どもが楽しみにするような授業、有意義なコミュニケーション活動が展開できるようになったこと。三つ目は、さまざまな研修の機会を得て、教師の指導力も向上してきたことなどが挙げられます。

一方、課題としては、中学校へ向けて、円滑な接続が可能となる指導内容・指導方法はどうか残されています。

今後もよりよい授業を目指し、謙虚に授業改善を図っていききたいと思えます。

本発表、そしてこれから公開いたします二つの授業に対して、後の分科会におきまして忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げます。以上で本校の取組の発表を終わります。

外国語活動に関する
意識調査から3

終わりに

締め

■ For citation:

- 仲 公一 (2011) 豊かなかかわりを通して生きる力をはぐくむ学習の創造—ひと・もの・こととよりよくかかわり合う力の育成—. In: Reinelt, R. (ed.) (2011) *Foreign Language Learning and Teaching Places: Schools, Universities and Others* Rudolf Reinelt Research Laboratory EU Matsuyama, Japan, p. 11 – 23.



研究目標

- 国語科や外国語活動において、「話す・聞く」を中心として、授業における三つのかかわり合い（教材・友達・自分自身とのかかわり）に着目した教師の有効なはたらきかけの在り方や、日常的な音声言語活動を工夫することにより、相手と自信をもってよりよくかかわろうとする子どもを育てる。

- 言語活動の充実を図ることで、子どもに課題解決に必要な思考力・判断力・表現力を育てる。

研究の仮説

1...国語科

国語科を中心として、言語活動を適切に取り上げて指導することで「話すこと・聞くこと」に関する指導の工夫を図ったり、効果的な伝え合い・学び合う場の設定を工夫したりすれば、子どもは自信をもって自分の思いや考えを表現

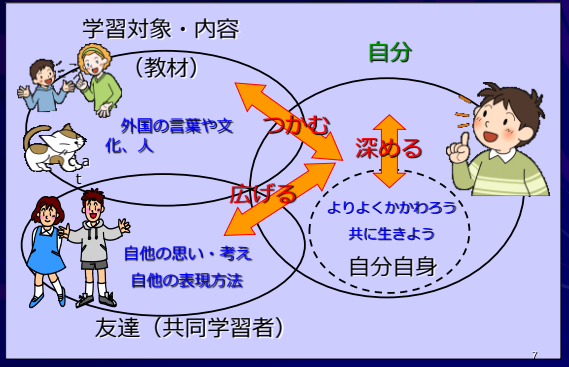
2...外国語活動

「聞くことや話すこと」を中心とした相手とかかわる必然性のある教材や活動を工夫したり、相手意識をもたせるための手立てを工夫したりすれば子どもは外

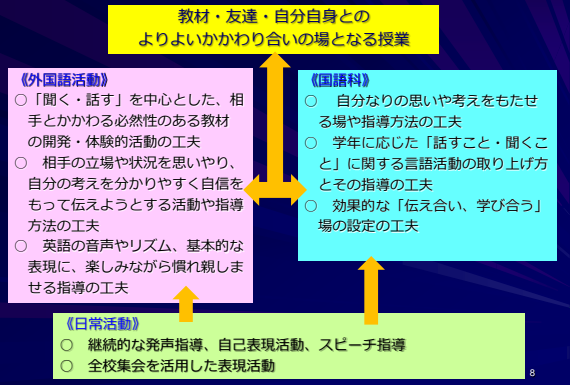
3...国語科・外国語活動

日常活動の中で、音声言語活動の場や自己表現を行う場を工夫したり、外国の言葉や文化に慣れ親しむ活動や場を工夫したりすれば、子どもは自信をもって相手とかかわったり、様々な言葉や文化に対する理解を深めたりすることができると考えられる。

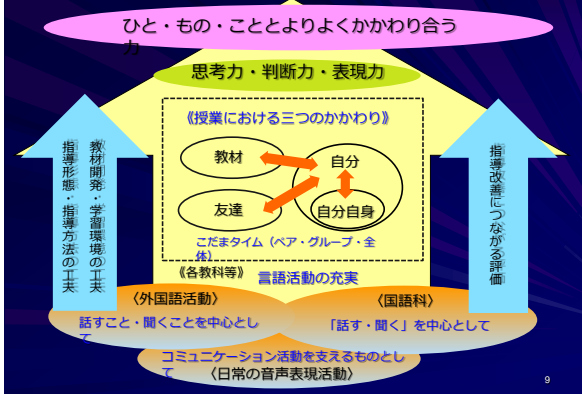
授業における三つのかわり - 外国語活動の例 -



研究の内容



研究の構想



これまでの取組 《平成20年度 文科省の拠点校として》
 第5・6学年において週1時間程度英語活動を実施
 ・英語活動等国際理解活動の質の向上を図る実践的な調査研究

☆英語ノートの内容の有効性を探る

- 《主な取組》
- 1 教員の指導力向上のための取組
 - 2 指導方法の改善工夫
 - 3 子どもの興味・関心等学習状況の変容の把握
 - 4 A L Tや地域の人材等の効果的な活用
 - 5 全体計画・年間指導計画の作成
 - 6 その他 (小中連携・ICTの活用等)

これまでの取組 《平成21年度 市のモデル校として》

- ・外国語活動の指導における、教材・教具の開発
- ・人材活用を含めた効果的な指導方法の実践研究

☆ コミュニケーションの必然性を高める教材の開発

とその指導方法の工夫



5年 L6 「買い物ゲーム」



6年 L5 「道案内ゲーム」

今年度の取組 《平成22年度 市のモデル校として》

《過年度の課題》

- ・ 相手の立場や状況を思いやり、自分の考えを相手に自信をもって分かりやすく伝えたりするなど、コミュニケーションの質を高めるにはどうすればよいか。
- ・ 英語の音声やリズム、基本的な表現に、楽しみながら慣れ親しませる指導はどうすればよいか。

過年度の成果を生かしながら

《今年度重点的に取り組んでいること》

☆ コミュニケーションの質を高めるための教材開発とその指導方法の工夫

☆ 「繰り返し」をうまく取り入れながら、英語の音声やリズム、基本的な表現に親しませる教材開発とその指導方

具体的な取組 《指導案の検討》

昨年度の指導案を基本としながらも、よりよい授業を目指して、毎時間、学年部が中心となって、以下のような視点から少しずつ工夫・改善を加えて授業に臨んでいる。

〈活動内容、教材、指導方法・体制の検討の視点〉

- 1 実態や発達段階に応じた内容か。
- 2 興味・関心をもつ、楽しい教材か。
- 3 コミュニケーションの必然性が生じるか。
- 4 よりよいコミュニケーションがとれるか。
- 5 「繰り返し」が取り入れられているか。
- 6 A L T 等や学担の有効な役割分担は明確か。



13

具体的な取組 《5年生の取組 1》

Lesson 5 「いろいろな国の衣装を知ろう」

☆ コミュニケーションの必然性を高めるとともに、繰り返し発話させ、色や

衣装の英語に慣れ親しませるために

いろいろな衣装を、一列に10個程度床に並べ、二つのグループがその両端から、衣装の種類と色を英語で発話しながら進む。途中で相手と出会うと、英語じゃんけんをして、負けたら、チームの最後列まで戻り、次の者とバトンパスする。相手の陣まで早くたどり着けた方が勝ち。



- ◎ 衣装の種類や色を、繰り返し、楽しみながら発話することができる。
- ◎ 発話に自信がない場合は、同じグループの仲間から助けてもらえる。

14

具体的な取組 《5年生の取組 2》

Lesson 5 「いろいろな国の衣装を知ろう」

☆ 繰り返し発話させ、自信をもって分かりやすく相手に伝えさせるとともに、

コミュニケーションの質を高めるための指導の工夫

「自分が買った衣装を紹介しよう」
買った物で買った自分の衣装を、ショー＆テルで友達に紹介する活動を取り入れた。「ペア」→「グループ内」→「別のグループ」と段階を踏みながら、何度も紹介させた。聞き手には、A L T から学んだ、「Cool!」「Cute!」などの言葉かけをさせるようにした。また、日本語での褒め言葉もOKとした。



- ◎ 紹介の回数を重ねるたびに自信をもって表現できる。
- ◎ 聞き手から褒め言葉をもらうことが活動への意欲化につながる。

15

具体的な取組 《6年生の取組 1》

Lesson 4 「できることを紹介しよう」

☆ 英語の表現に慣れ親しませ、より実感の伴ったコミュニケーション活動を

成立させるために

「あなたは本当に～できますか」
けん玉・フラフープ・なわとび等の用具を実際に用着し、グループの友達が「Can you ~?」と挑戦者に問いかけさせた。挑戦者は、まず、予想で「Yes」か「No」を答えた後、実際にその種目に挑戦してみ、できるかできないか確認させた上で、改めて「Yes」か「No」かを答える活動を取り入れた。



- ◎ より自分の実感のごもったコミュニケーション(表現)ができる。
- ◎ 見聞きしている側にも興味深い活動となる。

16

具体的な取組 《6年生の取組 2-1》

Lesson 4 「できることを紹介しよう」

☆ コミュニケーションの幅を広げ、相手とのよりよいコミュニケーションを

成立させるために

本単元で使用する「I can ~」に加え、5年生で学んだ「I like ~」を使うことで、紹介する内容の幅を広げた。まず、自分の自己紹介に必要なカードを選び、そのカードを担当している指導者のもとへ行って、「What do you like?」「What can you do?」などの問いかけを受け、それに答えたら、好きなもの・きれいなもの、できること、できないことのカードを受け取り、それを自己紹介カードに貼り付けるようにさせた。



- ◎ ショー＆テルの場面で、相手とのコミュニケーションの幅が広がる。
- ◎ 指導者とのコミュニケーションを図りながら、紹介カードが仕上がる。

17

具体的な取組 《6年生の取組 2-2》

Lesson 4 「できることを紹介しよう」

☆ 自国・他国さまざまな地域の言葉や文化に触れさせ、それらに慣れ親しませるために

『「好きなもの・きれいなものカード」 「できる・できないカード」』の作成

「好きなもの・きれいなものカード」の中には、外来語として取り上げられているものだけでなく、たこ焼きやうどんなど自国も含めたさまざまな地域の言葉や文化に触れられるよう配慮した。一方「できる・できないカード」については、初めて取り上げる表現なので英語ノートに示されている内容に限定して示した。

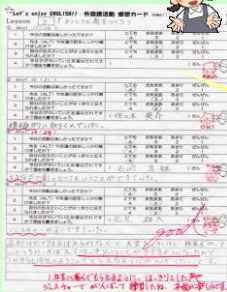


- ◎ さまざまな国の言葉や文化に触れ、無理なく慣れ親しませるよい機会となる。

18

具体的な取組 《指導改善につながる評価》

(評価カード)



授業に対する関心・意欲・態度の状況

「聞く」態度に関する状況

「話す」態度に関する状況

がんばっている友達の状況

4時間分の評価を、一枚の紙に

本時(単元)の目標に照らして自分や友達の取組の状況を記入する

※ 評価カードの分析を通して、改善策を検討する。

具体的な取組 《全学年・「こだまタイム」の実施》

こだまタイム(ペア・グループ・全体での話し合い)を授業における三つのかかり合いに照らして適切な場面で設定し、伝え合い・学び合う場として十分機能するよう指導を重ねている。



ペアで原稿を検討する



グループで話し合う

具体的な取組 《全校表現集会・校内音楽会等において》

全校表現集会(すてきなことば集会)や校内音楽会等において、全校児童が、英語やさまざまな国の言葉に触れる機会を設け、外国の言葉や文化への関心を高めている。



すてきなことば集会「世界のじゃけん」



校内音楽会(6年) 英語版「翼をください」

具体的な取組 《ALTとの全学的なかかわり》

週2回来校するALTと全学的なかかわりをもたせ、交流を深めたり、英語への関心を高めたりするため、「朝のあいさつ」「交流給食」「給食放送でのイングリッシュコーナー」等を設けている。



朝のあいさつ



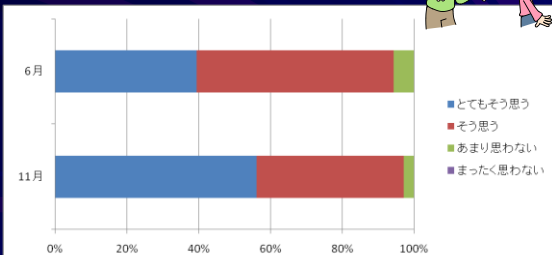
交流給食



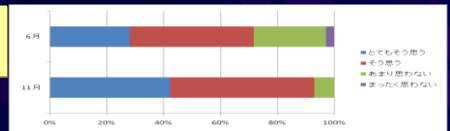
サフィアズ・イングリッシュコーナー

外国語活動に関する意識調査から 5・6年生対象、6月・11月実施
全般的に11月の方が、6月に比べて望ましい結果に

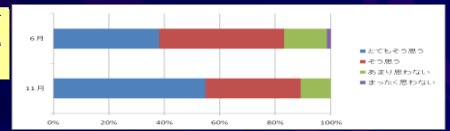
外国語活動の授業は楽しみですか？



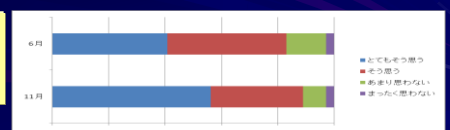
外国語を聞くことが楽しいですか？

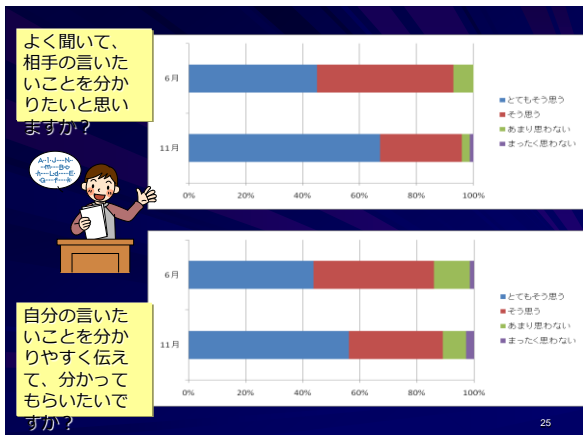


外国語を話すことが楽しいですか？



絵や実物で紹介し合うことが楽しいですか？





終わりに

文科省の拠点校、市のモデル校に指定

《成果》

- 本校なりのカリキュラムや指導体制、環境等が確立してきた。
- 子どもが楽しみにする授業、有意義なコミュニケーション活動が展開できるようになった。
- さまざまな研修の機会を通して、教師の指導力も少しずつ高まってきている。

《課題》

- 中学校へ向けて、円滑な接続が可能となる指導内容・指導方法はどうあるべきか。

26

